

大垣商業高校

「グッドラック」

2018. 12. 26 上演1

この劇は商業高校に通う高校3年生の女子達の、大人と子供の狭間に揺れ動く「高校生」という不安定な立場の葛藤を描いた作品である。

創立100周年を迎える学校の垂れ幕作りを任された美術部員達。しかし大人達の身勝手な事情によって制作中止になってしまう。このことをきっかけに「自分たちのしていることは本当に意味があるのだろうか。」と自問自答し始める。それは垂れ幕制作に限ったことではなかった。高校卒業後の就職先、商業高校生ならではの社会に出て行く不安と覚悟が等身大の商業高校生たちによって表現されていた。

台の上に立つ先生とただの平たい地面に立つ高校生。先生が高校生達より上に立つことで二つの立場が視覚的にとてもわかりやすく表現されていた。周りに配置された四本の柱を役者達が運びだし、授業で使用する机になるところはその発想に驚かされた。

職員室のシーンでは実際に職員机や扉が無くても、舞台の手前に照明を当てることでシチュエーションの変化が自然と頭に入りやすく、とても効果的な照明の使い方であった。また、ラストシーンのはっきりとした照明には高校生達の未来を生きていく強い気持ちが表現されていた。

商業科長を実際に登場させずロボットのような機械的な声だけを流すことで、何を考えているのか分からない得体の知れない怖さが強調されていた。

劇中のスモークは無限に広がる空の雲だったり、運動場の砂ぼこりや戦場っぽさだったり、見る観客に様々な効果をもたらす深い演出であったといえる。

この劇で印象的だったものの一つは、たくさんの役者達の息のあった台詞や動き、劇中幾度もあった倒れる動きの自然さだ。冒頭の「そろばん体操」では商業高校の楽しさが見ている私達にも伝わり、思わず私達までノってしまうような引き込まれる演技だった。そこには実際の高校生が高校生役を演じているからこそそのエネルギッシュさがあったように感じられた。

高校を卒業してしまえば、「子供だもの」という言い訳は通用しない。

「小さい頃ははやく大人になりたいと思った。でも大人になればなるほど子供でいたいと思った。」そんな心情の変化は過去からも未来からも今からも逃げていることに過ぎない。そんな高校生達の切なく、どうしようもない気持ちは現代の高校生達にも、かつて高校生だった人達にも、はたまたこれから高校生という複雑な年代にはいつていく人達にも共感しやすいものであっただろう。それでも最後には希望に満ちあふれた表情をした高校生達の姿には、子供時代に築き上げてきたものを糧にまだ見ぬ大人というフィールドに足を踏み入れていく強さを感じた。

大人とは何か、子供とは何かということを深く考えさせられる作品であった。

大垣商業高校の皆さん、お疲れ様でした。